

曾野綾子
二十一歳の父

曾野綾子
二十一歳の父

新潮社

二十一歳の父

¥ 950



© by Ayako Sono. 1963

Printed in Japan.

昭和三十八年十一月二十六日 発行
昭和五十四年十二月十五日 二十八刷

著者 曾野綾子

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部 (〇三) 五一一一

編集部 (〇三) 五四一一

振替 東京四一八〇八番
印刷 塚田印刷株式会社
製本 神田加藤製本

装幀 大沢昌助

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

一章 学 僑……………五

二章 冬の月……………七〇

三章 はまゆうの村……………一〇八

四章 二十一歳の父……………一四〇

五章 生涯の半分……………一七六

終章 妻恋い……………二四四

二十歳の父

一章 学 僑

1

バンコックの飛行場はむしあつかった。

給油のために下りた飛行機の客は、ぞろぞろと連れだって、冷房のきいた食堂の方へ歩いて行った。黄色い衣を着た原地人の僧侶が何人かブノンペン行きの飛行機の改札に並んでいるのがみえる。

越源一郎・神田大学教授も食堂行きの群の中の一人だった。越教授は一年間を西独で過して、今、日本へ帰る途中だった。

東まわりの飛行機は時差を調整すると、時間がどんどんとんで行くような感じである。時計の

針は、着陸地点ごとに、三十分から時には一時間以上も時間をすすめることになる。

ここまで来ると越は帰心矢の如しであった。いい加減にして早く着いてくれないか、と思う以外にない。香港で一泊したら、という案もあったが彼は直行するスケジュールをたてた。彼は気の短い男だったので、時計の針をすすめてもお、時間の経つのもどかしくてならなかった。

食堂に入ると越は、彼が乗って来た飛行機会社の旗のたっているテーブルに手もちぶさに腰を下ろした。ボーイが何を飲むかとききに来たので、彼はコカコーラと答えた。彼は何を飲むかを考えるのも面倒くさい時は、いつもコカコーラと答えるのであった。

一刻も早く日本に帰りたいとは言っても、越は、日本に帰ることによって何かしら期待していることがある、という訳ではなかった。日本へ帰ったら、久しぶりに温泉に行つて、浴衣ゆかたがけでのんびりしてみたいとか、寿司を食つてみたいとかいう欲望もなかった。越は、日本座敷などいかなかったし、ドイツ風の黒パンとビールとソーセイジさえあれば別に飢死うゑじにすることはあるまいと考えてこの一年を暮して来た。彼はそういうことには、恐ろしく無頓着であった。

むしろ彼は、日本に帰るや否や、再び彼のまわりにへばりつくように戻つて来る筈の、気重な生活に対処して暮して行かねばならないことに、或る種の当惑を感じてはいた。彼は別に家庭というものを煩しいと思つている訳ではなかったが、多くの場合、一人になりたいという願望のほが強かった。彼は、確かにあそこにある、という本を掃除のために動かされるよりは埃だらけの部屋にいるほうがよかつたし、下着を手まめに着換ええないといつて注意をされることもうるさかつた。下着の汚れは彼の精神活動を少しもさまたげない。下着はむしろ少し汚れている位のほ

うが人間的だと彼は思うのであった。体臭が強いうえに、へどを吐きたくなるような不潔な衣服を身につけている外国人を見た時に、彼はいっそうその観を深くした。軽薄な言い方をすれば、汚ないのは最も端的に、人間的であるような感じだった。

越はボーイの持つて来たコカコーラをのみながら、向うのテーブルで紅茶をのんでいる一人の男を見るときも注目していた。

越はその男を、どこかで見たことがあるような気がしてならなかった。しかし、彼はどこで会ったかということを出せなかったし、よく見ているうちに、果してその男が日本人かどうかとも疑わしいような気がして来た。四十六、七歳であろうか。やせた体に黒っぽい背広を着て、眼鏡をかけている。

そのうちに相手も越の視線に気がついて、何となくこちらを注意するようになったので、越はもうそれ以上、相手を観察するのをやめた。

給油の時間は三十分、ということになっている。しかし、規定通りの時間で作業が終ったためしはないようであった。越は、日本へ帰りつく、という確固とした目的を持っているにも拘らず、空になったコカコーラの壺を前にして現在のこの時間を妙に虚無的なものに感じていた。

やっとアナウンスがあつて乗客が食堂を出た時、越は急ぎ足に歩いたので、どこかで会ったところのあるような男をはるかにひきはなしてしまった。タラップのところまで来た時、越は先頭から三番目だった。黒っぽい背広の男は灼けつくような飛行場をゆっくり歩いていた。たとえ彼が日本人でどこかで会ったことがあったとしても、それは別に何か大変に興味深かったとか、感動

的だったとか、という記憶に結びついて出会ったのではなさそうだった。そう思いなおすと、越の、その男に対する興味は半減した。

越はさっさと自分の席に坐って座席のベルトを締めた。すると驚いたことに、その男が通路をへだてた反対側の席に陣どったのである。そこはバンコックまで、空席だったところだった。男は足許にカバンを置き、すわらないうちにズボンのポケットからピースの箱を出しておいた。用意周到な感じだった。それから彼は極く何気なく、越教授の方へ向いて言った。

「神田大学の越先生ではいらっしやいませんか」

「はあ越ですが、あなたは……」

「広報社の酒匂さかづでございます。いつぞやラジオ番組の時にもお世話になりました」

「ああ、どこかでお目にかかったと思いました」

広報社というのは、有名な広告取次会社であった。広告そのもののばかりでなく、テレビやラジオ番組の作成から、会社のパンフレットを作ることまで、その営業種目は広汎にわたっていた。越教授は、一年前外国へ行く間際に「経済白書を見る」という十五分番組の録音を、広報社の銀座スタジオでとったことがあり、その時、この酒匂氏に会ったことを思い出した。

飛行機がプロペラをまわし始めて、スチュワーデスがチューインガムを配りに来た時、酒匂氏は改めて越に名刺を渡した。それには、広報社 外国部長 酒匂彰あきらとあった。

二人はそれから暫く黙った。滑走路の端まで来て飛行機のプロペラがやかましくなったので、否応なく沈黙せざるを得なかったのである。

やがて飛行機は、腹にこたえるような響きで滑走を始め、東南アジアの黒ずんだ分厚な森がじつとりと熱いきらめくような熱帯の陽の下に低く拡がって見え出したころ、やっと禁煙やベルト着用のサインが消えて、越は座席の中で、体を少しでも楽にしようとしてすわりなおした。

「いかがです」

酒匂は一服つけようとしてその前にピースの箱を越にさし出した。

「いやどうも、それでは久しぶりでですから頂きますかな」

越はそれほど煙草好き、というわけではなかった。彼は煙草は弱いものなら何でも好きだったので、むしろピースよりも英国タバコを愛用するのである。しかし彼は酒匂の好意を無にしたくなかった。只ピースの味は日本の生活のうつつとしさを、感覚的に彼に思いおこさせた。日本は近きにあるという感じだった。

「あの節御挨拶申しあげようと思っていました、実は私共の息子が先生に御厄介になっております」

酒匂は言った。

「そうですか」

越はちよつと考えこんだ。

「覚えがありませんな。私の演習に出ていられますか」

「いや、とても、そんなに出来がよくありませんので、御記憶はないと思いますが。只先生の講義を伺っている、という話をきいたことがあります」

「そうですか。何しろ経済学部は数が多いですからね」

越は言った。

「私共では長男のほうは、まあまあ出来がよろしいのです。東大を出て、日銀に入りました。しかし次男はさんざんです。お世話になっておきながらそういうのもひどいものですが、実は入学の時もやっと入れて頂いたような状態でした」

酒匂は意味深長なものの言いかたをした。それからふと彼は長男の結婚式の日の嫁の姿を思い出した。白無垢を着て神々しいような花嫁であり、色なおしになって客をおくり出す時には、いっばしもの馴れたホステスぶりを見せた女である。嫁はW銀行頭取の娘でカトリック系の女子大学を出ている。語学もお料理も刺繍もみっちり仕込まれていた。式は帝国ホテルで行われ仲人は広報社社長であった。立派な息子は、いい娘を嫁につかまえることが出来るという見本のような結婚式である。

その宴に、次男の基次は、髪も髭もぼうぼうの姿で現われた。式の前々日床屋へ行けと命じると、それ位なら兄さんの結婚式には出ない、と言い出した。基次はどちらかというとき無口で無器用な子であったが、大学の演劇部に籍をおいて、映画のエキストラに出るために髪と髭を伸ばしているのだった。

「金がいるなら、その分だけお父さんがやるから、エキストラはやめて床屋へ行け」

酒匂はそう言ったが、基次はうんと言わなかった。

「何という映画だ？」

しまいには酒匂は息子に尋ねた。それは「敗走千里」という戦争ものの映画であった。舞台はフィリップスのジャングルが主である。

「だけど僕の出るのは違うんだ。夕陽を受けた砂浜に、見渡す限り死体が散らばってる、その死体になりに行くんです。やせて、髪や髭がのびている学生を募集してるんです」

酒匂は呆氣あつけにとられた。きいてみると、エキストラばかりではあるが、基次は実に今までに八本の映画に出演しているというのである。死体役になることにどうしてそう執着するのか酒匂はとても理解出来なかった。しかし、父子はいくらか言い合った拳句、結局、酒匂は折れることにした。

基次は乞食のような頭に学生服を着こんで結婚式に列席した。酒匂は男であったのでいざとなれば次男の髪のことなど気にもかけていなかったが、基次の叔母にあたる酒匂の妹は氣にして、会う限りの人に基次の言訳ばかりしていた。

「お宅の御子息はどうか知らないが、うちの息子も私の学部におりましてね、これが又本当にいい加減な奴なんです」

越は言った。

「ほう」

酒匂はじつと横から教授の顔を見つめた。

「私の講義にも仕方なく出ておったですがね。授業が終ると真先に教室をとび出して、こそこそ逃げ出す始末です。気のいい、可愛いところのある人間なんだが、可愛いなどというのは、あな

た、女にはいいが、男には実に何のとりえもない性格ですからね」

「しかしそれには少々御子息さんに同情すべき点がありそうですね。お父さんが教えていられる学校というものは居にくいだろうと思いますね」

二人は黙った。男親の感情というものはごまかしのきかない正直なところがあった。

「ときにあなたはどちらへ行かれました」

越教授は尋ねた。

「二月ばかり、香港、マニラからシンガポールをまわりました。シンガポールに見本市がありましたので。先生はどれ位、外国ですごされました？」

酒匂はきき返した。

「丁度一年でした」

「東南アジアは、下りてゆっくりごろんになりましたか」

「いや、それが、まだ知らないのです。この前はアメリカへ行きましてね。今度も帰りにゆっくり見ながら帰るつもりだったのが、少々早く家に帰ったほうがよさそうな用事も出来たものから」

そう答えてから越は改めて相手にきき返した。

「東南アジアは如何です」

「暑くて閉口しました。私は北海道の産ですので、寒いのはいくら寒くてもかまわないんだが、むしろ風呂のような暑さでは、何も考えられないです」

教授はベイルトに着陸した時の暑さを思った。レバノンもひどい湿度だった。その湿度が甘い夜の雰囲気を作る、一つの要素になってはいた。まだ本当に完成してはいない飛行場のヴェランダから見ると、夜の暗さは湿気にうるんでつややかな黒味を帯び、遠く岡にひろがる町の灯と、足許のヴェランダにおかれた強烈な赤い花とを、くっきりと印象づけていた。

「食物もまづいそうですね」

教授は言った。

「まあひどいですな。シンガポールや香港はまだいいですが、三年前に印度やビルマをまわった時はさんざんでした。肉は固い、米はくさい、パンはべとべとで、暑さも手伝って食欲は全くなくなってしまいました。中でどこへ行ってもどうやら食えるのは支那料理だけですね」

「支那料理の材料というのは、あれはずいぶん行きわたっているものなんでしょうな」

「在留邦人にききますと、華僑がいる限り、豆腐は必ずあるそうですね」

「そうですね」

「かねがね話にはきいていましたが、実際に歩いてみても、華僑という奴はすごいんですね。東南アジア全体にべつとりと風がとりつくように拡がっているという感じですね」

「そうですね」

「全くあれを見ると考えさせられますよ」

その時、スチュワードスが食事のメニューを配りに来たので二人は話を中断した。

羽田に着いたのは真夜中近くだった。飛行機の通路の中で、二人の男たちは挨拶を交した。

「又何かと先生にはお世話になることと思いますが、どうぞ今後ともよろしく」

酒匂は越に言った。それは広報社の番組へ出演してもらいたいということなのか、息子をよろしく、ということなのか教授にはわからなかった。しかし越はそんなことには無頓着に答えた。

「いや、お宅には毎年うちの学生を沢山とって頂いておりまして、本当にありがたいと思っています。こちらこそ今後ともよろしく願います」

二人はちよつと道を譲り合つた末、教授が先にタラップを下りた。爽かな故国の秋風だと教授は感じた。酒匂氏は寒さが身にしみるように感じた。たった二カ月間だが、皮膚は南方ほけであった。

二人は言い合わせたように、フィンガーに立って手をふっている家族の顔を見あげた。酒匂は手をふり、越は只眼で微笑しただけであつたが、二人はそれぞれに出迎えの人々を意識していた。

酒匂は会社の連中の顔の中に長男とその嫁の美しい笑顔を見た。妻はもともと来る筈がない。

酒匂夫人はもう十年間も脊髄カリエスでねたきりであつた。只次男の基次の姿だけが見当らないのが酒匂は不思議だった。

越教授には「お父さん、お帰り！」と叫んでいる息子の秋穂が妻と並んでいる姿が見えた。妻は彼の二番目の妻でまだ三十五だった。秋穂は継母と肩をすりよせて楽しそうに立っていた。教授は二人の姿を認めるとすぐ、秋穂にとっては、姉に当る娘の屋寿子の顔を探した。彼女は来ていないようだった。多分いないだろう、と教授は覚悟をしていたものの、本当に見えないとなる